

遺物からの情報を読む（II）

—— 岡山県牛窓町島嶼部の石器類を中心として ——

小林 博昭*・白石 純**

*岡山理科大学理学部

**岡山理科大学自然科学研究所

(1995年9月30日 受理)

諸 言

本稿で扱う資料は、岡山県邑久郡牛窓町島嶼部で採集された資料の一部である。ここでは、それら資料のうち、石器類を製作技術から得られる情報をもとに分析をおこなう。なお、遺跡名は採集時点での命名であり、将来正式な名称が付与される事が予想される。本文中の石器番号と実測図のそれとは一致し、石器実測図中、白抜きの部分は主に新規の損傷を受けている箇所である。

遺跡と石器類

青島第1地点

青島は牛窓港の東南海上約3.9kmに位置し、本土との間に前島が介在する。島自体の周囲は約2.5km、東北から西南に伸びる細長い地形を呈し、島内の最も高い所は標高約30mである。第1地点は、同島東部で標高25.6mを測る平坦部に位置する。現在、関西学院大学の野外キャンプ場として整備されており、そのためか旧地形が若干削平されている。採集された遺物は全て石器類で、ナイフ形石器、剥片、碎片など総数12点を数える。

1. ナイフ形石器。横長剥片を素材とする。石理と素材剥片剥取との関係は、ほぼ順目となっている。左面上部を欠損する。調整は左面左側縁部に上方向からと右面側から施され、対向剥離の手法が採用されている。とくに下端部近くでは、後者の方向からのものが顕著である。右面側からの調整順序は、左面左側縁部においてほぼ上から順に下端へと向かう。さらにこれらの調整を切る形で、左面上方向からの調整が入る。同面中央から上に自然面が残存する。左面右側縁部下位の剥離面はポジティブな面であり、すぐ上で接する大小二枚の剥離面に先行する。右面左側縁部に使用痕が観察される。5.84×1.37×0.89cm。6.70g。サヌカイト製。風化が進行している。
2. 加工ある剥片。縦長剥片を素材とし、背面下端部と右側縁部に新規の損傷を受けている。背面は約六枚の剥離面から構成されている。打面方向からの剥離による中央の細い面が最も古い面である。この面に左右側縁部の大きな剥離面が後続し、末端部方

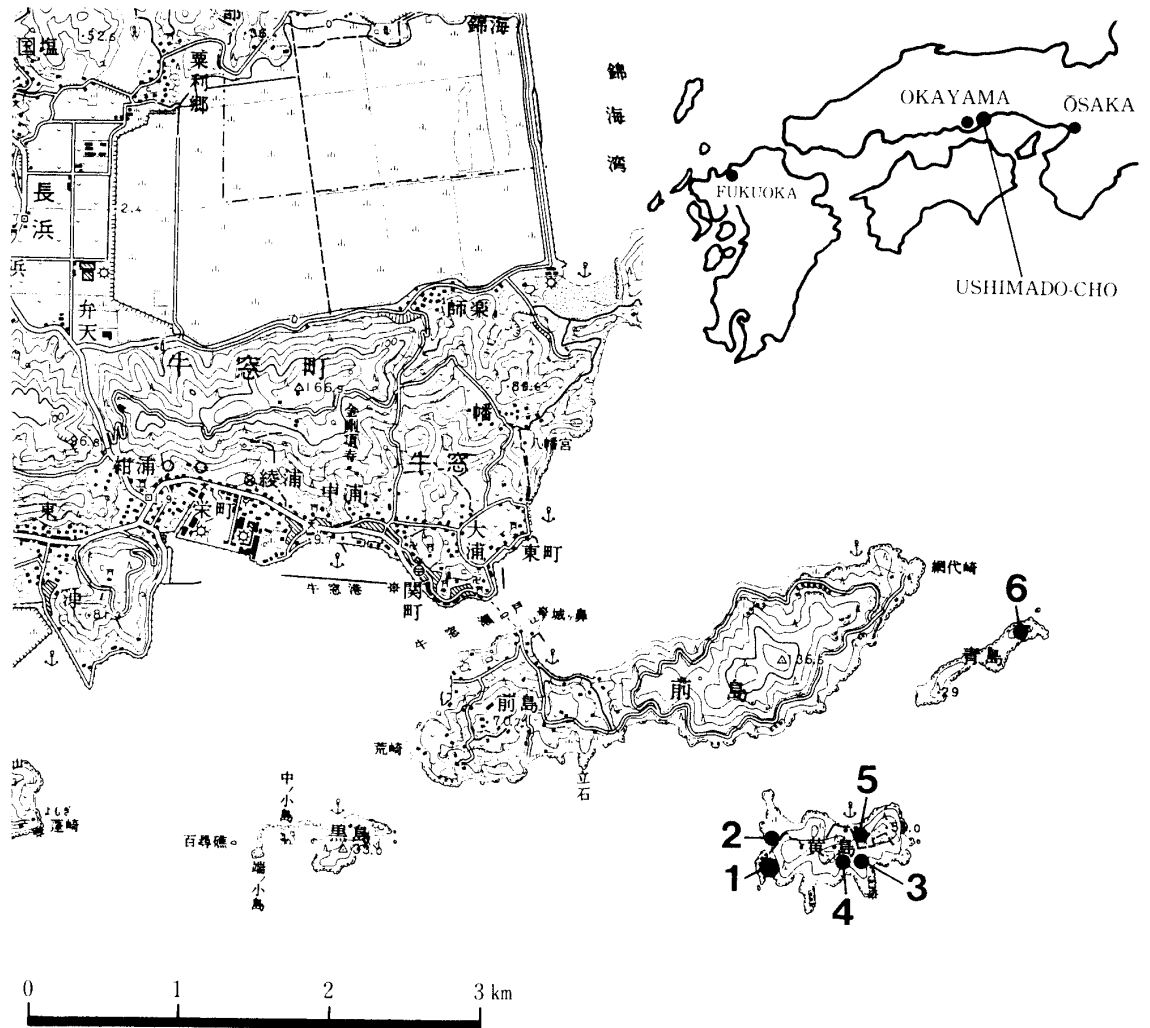


Fig. 1 Map showing the positions of the sites. 1 Kishima shell mound; 2 Kishima locality 1; 3 Kishima locality 2; 4 Kishima locality 3; 5 Kishima locality 4; 6 Aoshima locality 1.

向からの剥離面が入る。左側縁部の剥離面は左上，右側縁部のそれは右下方向からの剥取による。左右両者の剥離面に対して，さらに打面方向からの剥離による二枚の剥離面が後続する。剥離面としては新しいこの二枚の面に向かって，右面側から左右両側縁上位に細かな剥離による加工が施され，それは左右対称となる位置関係にある。右面にはバルブとバルバー＝スカーが観察され，打面は極めて薄い。4. $12 \times 1.36 \times 0.66$ cm. 3.78 g。瑠璃質安山岩製と推測され，風化が若干進行している。

3. ナイフ形石器。器体上下部を欠損する。左面右側縁部の調整剥離は右面側からのみおこなわれている。調整面では，中央二枚の大きな面のうち上の方が後出であり，この二枚の面の各々上下に位置する小剥離面が後行する。左面大半を占める大きな剥離面の剥離は，右側縁方向からである。同剥離面はポジティブな面の可能性がある。左側縁部に三日月状の剥離痕が存在し，使用痕と解されよう。右面側には使用痕が観察されない。右面，つまり素材剥片の剥取方向は上からであり，縦長剥片が使用されたことが推察される。 $2.28 \times 1.56 \times 0.59$ cm. 2.39 g。サヌカイト製。風化が進行している。

黄島第2地点

黄島は青島の西南海上約680m、牛窓港の東南海上約3.4kmに位置し、島の北には前島が約380mの最短距離で対峙する。島の周囲は約4km、東西方向に3つの小高い山が連り、最高点の標高は約60mとなる。島の南側には南に伸張するいくつかの尾根があり、とくに緩傾斜で南に向かう尾根の標高約40m付近に第2地点が存在する。現状は畑となっている。採集された遺物は、石鏃未製品と碎片の2点のみである。

4. 石鏃未製品。左面右側縁部では、下から上に向かう規則的な小剥離面が約三枚観察される。これらの剥離面のうち、最上位の面は上縁部右に位置する面に後行し、最下位の面は下縁部右の剥離面群よりも先行する。上縁部の小剥離面の形成過程は右から左へと順に新しくなる。下縁部においては、右面側にも三枚の剥離面が観察され、左面側のそれらとは、交互剥離による手法が適用されている。右面左側縁部中央に数枚の小剥離面が存在し、その剥離順序は上から下へととなる。この一連の剥離面は、左面側の対応する位置にある諸剥離面より後発する。左面左側縁部は破断面であり、下縁部の剥離面よりも後出する。2.57×1.50×0.47cm。2.04g。サヌカイト製。風化が若干進行している。

黄島第3地点

第2地点から西約100m、黄島貝塚から東約650mの所に存在する。南に面した平坦面に位置し、標高は約40mを測る。現在は畑地となっており、ナイフ形石器1点のみが採集されている。

5. ナイフ形石器。縦長に近い剥片を素材とする。左面上部、および左側縁部中央から下位の部分を欠損している。前者の破損は右面側からの加圧に起因する。調整は、右側縁部にみられる。同側縁部は右面側からの一方向による調整が主であるが、下位では左面そして右面側の両方向からの対向剥離による調整がなされている。右側縁部下位の大きな調整剥離面を切る形で、最下位に上下方向からの調整剥離が入っている。この剥離は側縁部の調整に比較して急角度である。左面中央から左の大きな剥離面の剥離方向は左上からである。ネガティブあるいはポジティブな面なのか識別には困難を伴う。中央から右に位置する二枚の剥離面のそれは右上方向からとなる。左面の刃部に三日月状の使用痕が観察される。3.71×2.37×0.87cm。7.41g。サヌカイト製。風化が進行している。

黄島第4地点

黄島貝塚から北東約700m、第三地点の北約200mの所で、黄島北側に設けられた黄島港の東側に位置する。北に面した緩斜面で現状は畑地となっており、標高は20～30mを測る。採集された遺物は石器類のみであり、楔形石器と削器の計4点である。

6. 楔形石器。左面および右面上縁部に一連のステップ状剥離痕が並ぶ。対向する下縁部の右面側では、約四枚の比較的大きく薄い剥離痕が見られ、左面側においては相当する剥離痕が観察されない。両面における上縁部の剥離痕群と左面末端部の大きな面は、左右両側縁部の破断面よりも先行している。左面両側縁部の破断面は、各々一枚の面構成であり、左側縁部のそれは左面方向から、右側縁部の破断面は右面方向からの加圧による。部厚な資料である。3.06×2.26×0.96cm。9.33 g。サヌカイト製。風化は進行していない。
7. 楔形石器。下端部が新規の破損を受けている。素材は縦長剥片であり、それを横位に使用している。左面上縁部にステップ状になった大小の剥離痕が並ぶ。この部分に相当する右面では、微小な剥離痕が観察される。同面は素材剥片の主要剥離面が残存しており、その剥取方向は左からとなる。打面等の上半部は欠損している。右側縁部は剥片の末端部であり、ステップ=フラクチュアに終わっている。2.46×2.61×0.51 cm。3.07 g。サヌカイト製。風化は進行していない。
8. 楔形石器。顕著なステップ状剥離痕が左面上縁部から右側縁部中位、そして同面左側縁部に見られる。同様の剥離痕は、右面の相当箇所にも存在する。左面上縁部から右側縁部にかけての剥離痕群は、同側縁部の破断面と上縁部のそれとを切って形成されている。左面左側縁部の剥離痕群は、下端部の破断面よりも先行する。また、左面の右側縁の破断面と下端部のそれとが交差する箇所は潰れており、付近では左右両面ともに小剥離痕がみられる。この小剥離痕は両者の破断面に後行する。2.15×1.97×0.48cm。2.77 g。サヌカイト製。風化は進行していない。

黄島貝塚

学史上、著名な貝塚であり、現在までに数多くの論考（鎌木 1949, 鎌木, 高橋 1965, 鎌木 1986, 平井 1987, 他）があり、多言を要しない。現状は畑地と休耕地になっている。石器類の大半は畑地からの採集品であり、同時に楕円押型文土器片、貝類も採集されている。石器類は、削器、加工痕ある剥片、石錐、ノッチ、楔形石器、石核、チップなど計約37点にのぼる。

9. ノッチ。左面は素材剥片の主要剥離面となり、横長剥片を使用している。バルブとリングは顕著であり、打面は、ほぼ三～五枚の面で構成される。下縁部中央から右にかけて三枚の剥離が入り、ノッチ部を形成する。これらの剥離面の打点付近は、さらに後発の剥離痕が深く抉り込む。同剥離痕は使用痕と解されよう。左面のノッチ部に対応する右面側、つまり素材剥片の背面側の箇所では、使用痕が殆ど見られない。右面は大小約四枚の剥離面から成り、剥離方向は右および上下の方向からの剥離による。後者の剥離は、前者のそれに後発する。1.93×2.75×0.49cm。素材剥片の打角114度。2.51 g。サヌカイト製。風化は若干進行している。

10. 石錐。素材剥片の末端部と側縁部の交差する箇所を作業に供している。素材剥片の上半部は破断により欠損し、上段の面の先端部では、左右両面からの細かな剥離が観察される。この剥離自体意識的な調整によるものなのか、あるいは使用痕であるのか、またはその両者であるのか、判別は困難を伴う。加うるに先端部は、使用による激しい磨滅を伴っている。上段の面における左側の剥離面は左、右側縁部中央から上位のそれは右上方向からの加撃による面である。下端部の面は破断面と解されよう。下端部と左側縁部が接する付近に微細な剥離痕が集中し、この箇所も先端部と同様な使用目的に供された可能性がある。下段の面の末端部に新規の損傷面が存在する。3.01×2.43×0.91cm。3.95 g。サヌカイト製。風化は進行していない。
11. 加工痕ある剥片。右面左側縁部下位に新規の損傷を受けている。右面は、素材剥片の主要剥離面であり、左側縁部方向からの剥取によるものである。素材剥片自体は、横長である。これに左右両側縁から加工のための剥離が入る。右面左側縁部に位置する二枚の剥離面は、左隣の破断面によって切断されている。右側縁部は加工のための剥離によって、緩やかな鋸歯縁状を呈する。左面には、素材剥片の主要剥離面と同一方向からの加撃によって形成された一枚の大きな剥離面が存在する。同剥離面に向かって、左側縁部全体から一連の小剥離が施されている。上下両端部を欠損する。4.02×2.12×0.56cm。5.90 g。サヌカイト製。風化はかなり進行している。
12. 縦長剥片。石理に対し半順目方向に剥離されている。背面右側縁部に位置する右方向からの加撃によって形成された面が最も古い面である。この剥離面に後発する形で、主要剥離面と同一方向からの連続した剥離によって縦長もしくはそれに近い他の剥離面が生じている。腹面では、顕著なバルブとアンデュレーションが見られる。打面は、背面側からの複数の剥離による面で構成される。末端部は、ヒンジ=フラクチュアに終わる。腹面の周囲に新規の損傷を受けている。4.65×2.77×0.77cm。打角98度。9.84 g。サヌカイト製。風化は若干進行している。
13. 楔形石器。下段の面の上縁部、右側縁部、下縁部が新規の損傷を受けている。上段の面の上縁部から左右両側縁部にかけて鱗状の剥離痕が並ぶ。上縁部の剥離痕群に対向する下縁部のそれらは、損傷を受けているため不明である。左側縁部上位に並ぶ剥離痕群に対向する右側縁部では、繊細な剥離痕、そして中央付近に比較的大きな複数の剥離痕が見られる。また、下段の面のこれと相当する位置である左側縁部下位では、ハジケによる一枚の大きな剥離面が存在し、これにステップ状の小剥離痕が後続する。3.20×3.06×0.60cm。8.19 g。サヌカイト製。風化は進行していない。
14. 削器。縦長剥片を素材とし、その剥離と石理との関係はほぼ順目となる。左面の右側縁部全体にわたる刃部は、右面側からの連続した剥離によって形成され、鋸歯縁状を呈する。刃部に左で接する二枚の大きな剥離面はいずれも末端部方向からの剥離による面であり、素材剥片の剥取方向とは180度異なる。右面上縁部は、新しく損傷を

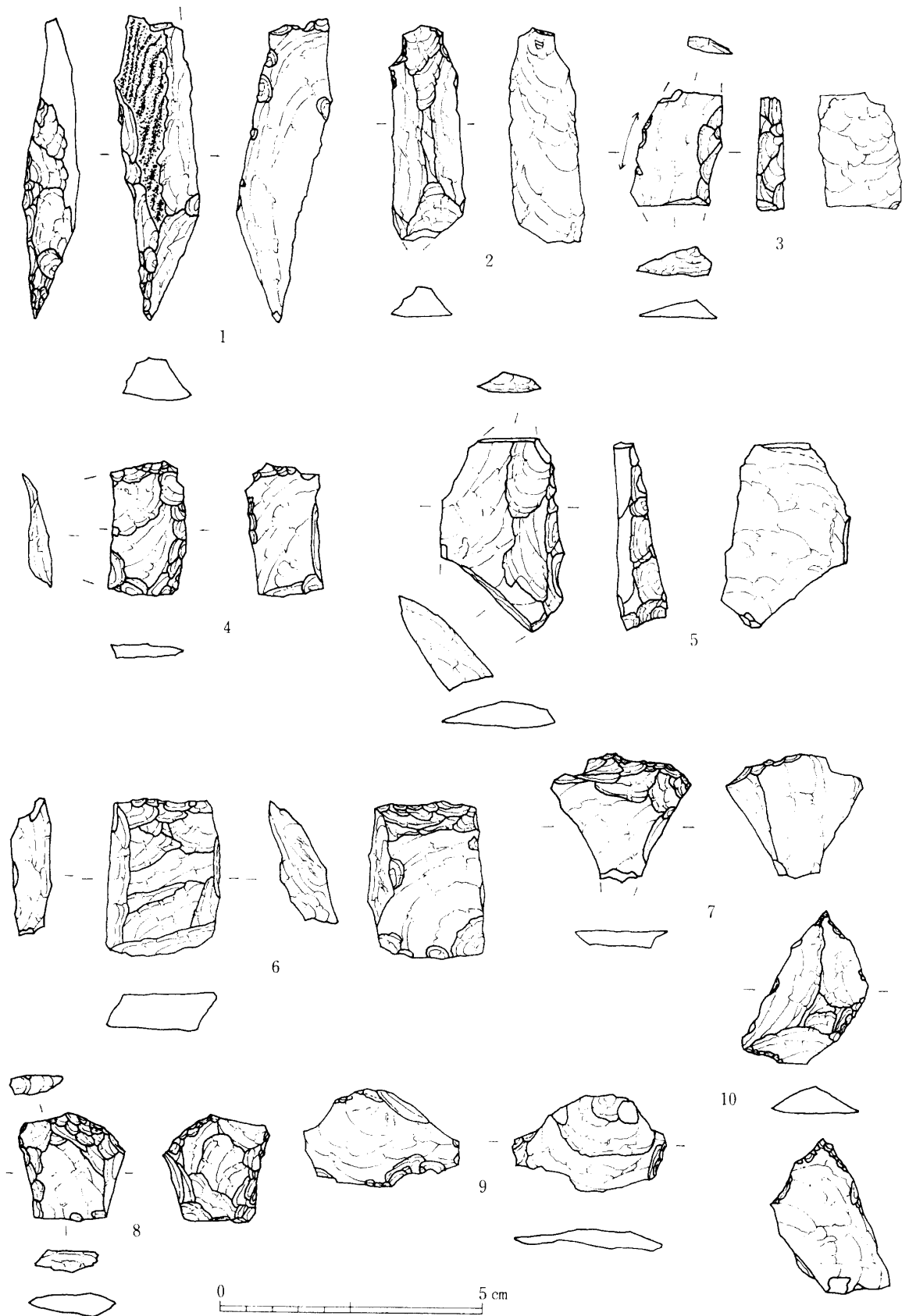


Fig. 2 Stone artifacts found at islands in Ushimado-cho, the eastern part of Setouchi area.
 1 to 3 Aoshima locality 1; 4 Kishima locality 2; 5 Kishima locality 3; 6 to 8 Kishima locality 4;
 9 to 10 Kishima shell mound.

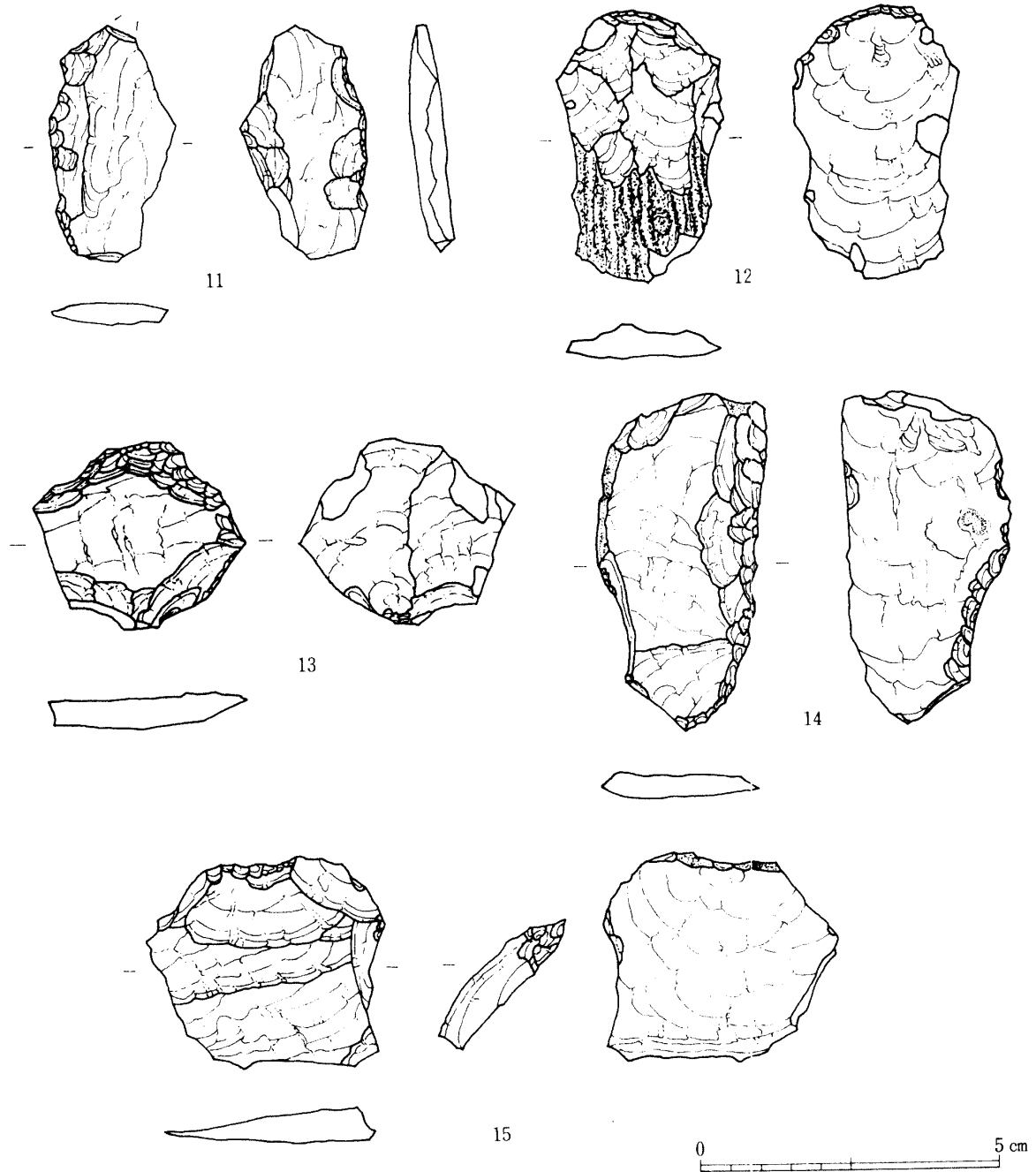


Fig. 3 Stone artifacts found at islands in Ushimado-cho, the eastern part of Setouchi area.
11 to 15 Kishima shell mound.

受けている。同面右側縁部の中央から下位にかけても連続する剥離によって加工が施されており、刃線は緩慢なコンケイブ状となる。左面のこの箇所には少数の使用痕が観察される。5.71×2.73×0.57cm。10.07g。サヌカイト製。風化は進行していない。

15. 剥片。背面は、右側縁部および下縁部に新たな損傷が見られる。同面上半部には四枚の大きな剥離面が存在する。右側の面は上方向から、これに先行する中央の貝殻状の剥離面も上方向からの加撃によって形成されている。貝殻状を呈する剥離面と左上で接する一枚の剥離面の加撃方向は左上からであり、後者の面が先行する。前者の剥離面と下で接し、横に伸びる剥離面の加撃は左上方向からなされている。同面とすぐ

下で接し、末端部へ向かう大きな剥離面の加撃方向は左上からであり、背面におけるすべての剥離面のうち最も古い面と解釈される。なお、右側縁部に位置し腹面方向からの加撃による一枚の剥離面は、これら二者に後行する。腹面は、打面中央付近に緩慢なバルブが観察される。打面部の大半に自然面が残存し、末端部はステップ=フラクチュアに終わっている。3.68×4.05×0.75cm。打角132度。12.9g。サヌカイト製。風化は進行していない。

ま と め

黄島は、これまで貝塚によってその名を知られていたが、今回の調査で新たに四カ所の地点が確認された。本稿で扱わなかった第1地点では、石鏃の破損品、石槍様石器、削器、剥片、碎片類が採集されている。土器類も採集されている。これら四つの地点のうち、第3地点はナイフ形石器が採集されており、黄島にも旧石器時代の遺跡が存在することを示している。加うるに青島第1地点においても、同様にナイフ形石器が発見されている。牛窓町およびその周辺の邑久郡域の分布調査は、戦前から地元研究者達によって精力的におこなわれてきた。しかし、旧石器の報告は長船町広高山遺跡（安川 1985）以外、皆無に等しいのが実情である。それゆえにこれら両地点発見のナイフ形石器は、同地域における旧石器時代文化の追究にあたって、今後貴重な資料となろう。さらに青島第1地点の横長剥片を素材とする大型のナイフ形石器は、右側縁部の一部にポジティブな面が残存している。したがって、素材剥片剥取のための石核は剥片であったことになる。さらに器体の調整が対向剥離によっていることなど留意すべき点を含んだ資料と言えよう。他の地点における石器類の帰属時期に関しては、その示準となる石器を欠くために不明である。石材ではサヌカイトが多用されてはいるが、肉眼的にも色調等かなりの種類に富んでいる。これらの出自に関しても、今後検討が必要になろう。

引用及び参考文献（ABC順）

- 平井 勝 1987 縄文時代 岡山県の考古学 地域考古学叢書 pp.50-106 吉川弘文館
 鎌木義昌 1949 備前黄島貝塚の研究 吉備考古 77号 pp.19-42 吉備考古学会
 鎌木義昌、高橋 護 1965 縄文文化の発展と地域性 瀬戸内 日本の考古学II 縄文時代 pp.230-249 河出書房
 鎌木義昌 1986 黄島貝塚 岡山県史 考古資料 pp.25-27 岡山県
 安川豊史 1985 付載1 広高山遺跡採集の石器 西谷遺跡 pp.1-4 岡山県長船町教育委員会

The analysis of stone artifacts
found at islands in Usimado-cho,
the eastern part of Setouti area (II)

Hiroaki KOBAYASHI* and Jun SHIRAISHI**

**Department of Applied Science,
Faculty of Science,*

***Research Institute of Natural Science,
Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1995)

This paper deals with stone artifacts found at islands in Usimado-cho in the eastern part of Setouti area. During the investigation, some new sites were found and stone artifacts collected from the surface at these sites dated to Upper Palaeolithic, Jomon and Yayoi period. Most of them are made from sanukite and few are from andesite. The contents of stone artifacts at each sites are as follows: Aosima locality 1: The total stone artifact amounts to 12 specimens. These consist of backed blunted knives, whole or broken flakes and chips. Knives are made on side struck flakes and the blunted technique was employed from the ventral and dorsal side of them. Kishima locality 1: Seven specimens are obtained. They include a spear head like tool, a side scraper, a broken arrow head and four flakes. Kishima locality 2: Two specimens are found. One of them is an unfinished arrow head and other one is a broken flake. Kishima locality 3: Only one backed blunted knife is discovered. Kishima locality 4: Four specimens are collected. There are three chisels and one side scraper. Kishima shell mound: The amount of stone artifacts is 37 specimens. They consist of side scrapers, notches, drills, chisels, unfinished tools, retouched flakes, utilized flakes, cores, whole flakes, broken flakes and chips. Palaeolithic artifacts and sites have been quite unknown at Ushimado-cho, so these backed blunted knives will be valuable specimens to study stone industries at this area.